

大館市総合教育会議 会 議 録

令和4年11月開催

令和４年度 第１回大館市総合教育会議 会議録

１ 日 時 令和４年１１月１５日 火曜日
開会 １５時 閉会 １６時３０分

２ 会 場 市役所本庁舎 会議室１０１、１０２

３ 出席委員 市長 福 原 淳 嗣
教育長 高 橋 善 之
委員 山 田 和 人
委員 根 田 穂美子
委員 工 藤 啓 子
委員 小笠原 正 卓

４ 事 務 局 教育次長 成 田 浩 司
教育監 長 岐 公 二
教育総務課長 小松原 功 秀
教育総務課長補佐 石 田 誠 樹
教育総務課長補佐 宮 崎 史 人
学校教育課長 畠 沢 依 子
学校教育課長補佐 工 藤 貴 胤
教育研究所長 米 澤 貴 子
生涯学習課長 糸 屋 みさえ
生涯学習課長補佐 鈴 木 明
中央公民館長 武 田 吉 輝
歴史文化課長 小 松 工
歴史文化課長補佐 加 賀 至

５ 協議事項 （１）次年度以降の重点的に講ずべき施策について

６ 会議内容

○成田教育次長

ただいまから、令和４年度第１回大館市総合教育会議を開会いたします。

本日の本会議構成員の皆様の出席状況は、全員出席でございます。

まず、会議の公開の取り扱いについてお諮りいたします。

本日は、傍聴希望者はありませんが、報道関係者の取材希望が１社いらっしゃいます。

本日の会議につきましては、非公開とすべき事項はないものと考えますので、会議

を公開とし、傍聴を許可したいと思いますが、ご異議ございませんでしょうか。
(異議なし)

それでは、本日の会議は公開とさせていただきます。

はじめに、開会に当たりまして、当会議の招集者であります福原市長がごあいさつを申し上げます。

○福原市長

委員の皆様、時節柄お忙しい中にもかかわらず参加していただきまして心から感謝申し上げます。

このパンデミックの2年半、むしろ教育の本質が何だったのかということを私たちは気付いたし、そこから得た学びや気づきを活かす時代に入ったと思っています。

先般、私と教育長は秋田県高等学校総合文化祭総合開会式の案内をいただき、出席してきました。結論から申し上げれば、人々の往来はもっと盛んになるのだが、それは武力を使った戦争ではないし、食料やエネルギーの収奪といった対立ではない。

国と国とをつないでいくのは文化で、その担い手は皆さんだということを伝えてきました。

ここにいる私たちは、2年半いろいろな経験を得てきました。ただ、青春を謳歌(おうか)している彼女、彼らにとっての2年半は、私たちと意味が違います。しかし、安心しました、目力がすごかった。やはり、大館での学びの環境がいい形になってきていると思いました。

限られた時間ですが、皆様と建設的にしっかり議論をしたいと思っていますので、今日はよろしくお願いします。

○成田教育次長

ありがとうございました。

これより本会議の進行は、大館市総合教育会議運営要綱の規定により市長が議長と定められていることから、福原市長にお願いいたします。

○福原市長

それでは早速進めます。

円滑なご審議にご協力いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

次第に従いまして、高橋教育長よりごあいさつをお願いいたします。

○高橋教育長

福原市長におかれましては、お忙しいところ本会議を開催していただきまして、ありがとうございます。

市長の教育に対する深いご理解と強力なバックアップによって、大館の教育が進化

し続けておりますこと、ここに感謝申し上げます。

先ほど、市長がお話したとおり、コロナ禍に3年近く過ごしたことで、教育の本質なり、これから目指すべき社会なり、地方都市なりの姿が見えてきたと思います。

おそらく、大館の子どもたちや高校生たちも遊べる機会が少なくなったと思いますが、その分、彼らの未来を見る力ができてきたと思います。

子どもたちの姿で教育の成果を語れるようになったことは、一番嬉しいことです。点数が一番になったということではなく、あの姿を見ることがふるさとキャリア教育の目的だったと改めて感じています。

それでは、ふるさとキャリア教育の概要について説明します。

戦略の重点ということで、大きな目的として3つ挙げられます。

「未来大館市民 少数精鋭の街大館の構築」、「教育のイーハトーブ 幸いに至る教育への普遍的な探求」、「学援拠点都市（イーハトーブ連邦）全国の区県市町村教委への支援・交流」ということで、大館の教育は大館だけにとどまらず、全国の同じ志を持っている地方都市又は先生・教育関係者とつながっていこうということです。

未来大館市民につきましては、学校のふるさとキャリア教育の一覧にあるように、当初のイベント的なものから、これを通してどういう人材・能力を育てるかという戦略的な性格になってきています。ふるさとキャリア教育は、質的にもSDGsの実現ということとかぶせて共通点があるので、そのベクトルのもとに進めています。

それから、大館生涯学習100年プランということで、昨年度から市長の肝いりで進めた「大館学び大学」がスタートし、つながってきたと実感しています。

「大館シビックプライドの育成」につきましては、子どもたちは十分高まっていますが、今日の午前中に花岡小学校で授業参観をした時の話で、市民たちのシビックプライドを高める働きかけをしていきたいと考え、来年度に向けて仕掛けていきたいと思っています。

「幼保小架け橋プログラム」は、全国で19の自治体が認められているもので、花岡小学校において向陽幼稚園、釈迦内保育所、釈迦内小学校の1年生との合同・交流授業でした。

文部科学省からも視察があり見てきましたが、あの空間にいただけで本当に幸せになりました。

教育的ないろいろな価値もありますが、あのような空間の中で子どもたちが交流すればするほど温かい空気が出てきます。幸せの源泉であるし、あの子どもたちの成長するエネルギーは、そこから湧いてくるのではないかと確信しました。

「幼保小架け橋プログラム」の特に大館は、全国の中でも最先端のところにいる分野なのでますます深めていきたいと考えています。

「未来人財プロジェクト」に関しては、特に地方都市を存続させるために不可欠な人材、医師と教師を自前で確保するという作戦です。来年度の医師は研修医が数名決まったことと、将来、教師になりたいという高校生が二十数名います。これも具体的になってきたと感じています。

「幸いに至る教育 教育のイーハトーブ」のICTを活用した「学びの大館最適化」ということで、大館型授業の実効性をさらに高めるためICTをどう活用するかという観点で研究を進めています。

先週、城南小学校で公開授業を行い非常に高い評価をいただきました。大館の授業の中にICTがなじんできた感触があります。ただ、ICTをさらに進めていくためにはハードの問題もあります。子どもたちはタブレットを持っていますが、先生たちは持っていません。先生へのタブレット配布や電子黒板をもう少し増やさないといけない問題もあります。

「R型コミュニティスクールの準備」は、現在、城西小学校ではコミュニティスクールの形で15年やっていますが、残りの24校を来年度からコミュニティスクールの形を取り入れることで進めます。ただ、コミュニティスクールではないが、地域と学校の一体化は既に実現していますので、学校に負担を掛けない形で構想しています。

「イーハトーブ連邦」は、令和4年度の教育ツーリズム実績と予定及び大館教育の発信（講演会、講話、出前授業など）をまとめたものです。

教育ツーリズムでは、コロナ前が500人くらい来ていました。コロナの1年目が60人くらいとなり、昨年度が90人くらい、今年は231人となっていますので、来年度は500人を達成できると思います。

何のために全国の自治体が大館に来ているかというと、一つは、ふるさとキャリア教育です。「ふるさとキャリア教育」は大館が作った言葉です。

北海道の市町村や鳥取県、沖縄県、今月は富山県が来ます。北海道の札幌市以外は大変な状況で、鳥取県も人口が少ないことでつながっています。

これらの市町村は“消滅可能性都市”であります。これをどう脱却するかということについて、人づくりの教育によって脱却するという戦略として、大館市を参考にしたいとのことです。

また、東京都の世田谷区、大阪府交野市、岡山県なども大館型授業を研修するために来ています。全国学力テストは大館市も世田谷区とほぼ変わらないレベルですが、大館型授業は学力だけでなく、人間力を育てるということだからです。自己肯定感や社会貢献意識など、いわばハイブリットの授業が大館型授業なのです。

最後になりますが、発信資料の「文部科学省ヒアリング」と「文部科学省若手・中堅懇話会」について、文部科学省総合政策局の教育のウェルビーイング・チームからの要請により、大館の教育の実情をインスパイアするとともに教育のウェルビーイングのあり方について、リモートでディスカッションをしました。

国で調査したところ、OECD38か国の中で、日本は確かに学力としてはトップレベルだが、自己肯定感や精神的幸福度が最下位クラスだと。

この事実から、22世紀まで生きる子どもたちのため、これから教育のあり方はどうあるべきかということをも根本的に探っているところで、大館教育のイーハトーブとウェルビーイングは共通しているところがあり、そのような新しい教育理念のモデルやエビデンスとして、大館教育が注目されている状態です。

市長部局の子ども課、福祉課、観光課、環境課、移住交流課などとコラボしながら施策を進めていますが、来年度もますます拡大しながら大館の未来のために頑張ってもらいたいのでよろしくお願いします。

○ 福原市長

続いて4番の協議事項ですが、協議に入る前に事務局から発言を求められていますので許可します。

○ 成田教育次長

議事の進行は議長である市長が行うとされておりますが、市長、教育長、教育委員の皆様には十分議論いただくため、事務局が進行し皆様に協議をお願いしたいと考えておりますが、いかがでしょうか。

(異議なし)

○ 成田教育次長

それでは、暫時進行は事務局が務めさせていただきます。

なお、本日、市長はこの後、公務がありますので、終了は4時30分をめどに終了させていただきます。

ご協力をお願いいたします。

それでは、「次年度以降の重点的に講ずべき施策について」を順次ご説明申し上げますが、ただ今、高橋教育長が挨拶の中で説明のあった施策テーマ「大館ふるさとキャリア教育戦略の重点」について協議します。

ご意見などある方は、挙手をお願いします。

○ 福原市長

経営戦略会議の時の話ですが、完全に日本は取り残されています。

どういうことかということ、DXとかGXと言っていますが、DXでは日本は相変わらずデバイスの話しかできない。そうではなく、発想の段取り、アルゴリズムとありますが、考えることと知恵を出すことの2つが人間として楽しいことだと自覚できないと伸びてきません。

そのスイッチをどうやって押すのかをずっと話しています。ぜひ、今の方向性で突き進んでほしいです。

大館学び大学が社会人の学び直しのリカレントで、大館市役所はまちの未来を創る頭脳集団だと定義しています。そして、職員の皆さんが学び直しをすることをどんどん奨励したいと思っています。私はこれをリスキリングと言っています。

総務部は、未来を思考し政策をデザインします。産業部は、まちの元気を創ります。市民部は、暮らしに便利を届けます。福祉部は、暮らしに安心を届けます。観光交流

スポーツ部は、まちと暮らしにワクワクとドキドキを届けます。そう再定義することが、自分で考え直して部長課長でコミュニケーションが取れ、気付き・学びの土台ができてきます。

こういうを導入するのはそこからです。そういう話がまったくなくて、端末がたくさんあればＤＸというのは違います。そういうところをしっかり押さえてもらっていることは非常にありがたいです。

○高橋教育長

先ほどの城南小学校の授業はまさにそこです。

授業で何を育てるか、人間性やどんな脳力を育てるのかということが前提にあって、ＩＣＴをどう身近に効果的に使うかということです。城南小学校で一番嬉しかったのはそこです。

○小笠原委員

城南小学校の授業を全部見て回ろうとしたとき、３年生の授業に入ったらそこから出られなくなり、１時間ずっと聞いていました。さらに、途中からＩＣＴの研究授業だということを忘れていました。

人間誰でも道具を与えられれば道具を使うことが目的になってしまうのですが、その授業は違いました。

ＩＣＴのデバイスが学びのツールとして、紙・鉛筆・黒板と一緒に、国語の研究授業のように見えました。非常に嬉しく思いましたし、このことが全市に広まってほしいと思いました。

○根田委員

私は１年生をずっと拝見させていただきました。みんな元気があり、元気をいただけてきました。電子黒板と子どもたちがつながっている、又、先生と子どもたちがつながっている姿を目の前にしました。

電子黒板に使われている、若しくは、子どもたちが持っているタブレットに使われている感じは見る限りまったくせず、ごく自然に使っていて先生の指導もすばらしく、一体となっていました。電子黒板はもっと増やしてほしいと思いました。

私も小笠原委員と同じように、どこの教室へ行っても立ち止まったと思います。先生の授業のすばらしさは、やはり、見て体感しないと分かりません。自然に子どもたちと交流できています。しかも、電子黒板が自然でした。

子どもたちが分かったところに“星”を送る。ただ、心配は“星”を送れない子どもたちが、コンプレックスを持たないかが心配で、それを先生に聞いたところ、最初は、できない子どもが泣いたりして大変だったけれど、自然に子どもたちが教え合うようになり解決していったと話していました。それを聞いて安心しましたし、先生の指導力のたまものだと思います。

○ 福原市長

全国の教育関係者が大館に見に来ます。

みんな感激して帰ります。

ここが重要です。

○ 工藤委員

私も城南小学校を拝見させていただきました。

この後目指す、「学びの大館最適化」ですが、要は最終的に紙と鉛筆と同じになるのが目指すところではないかと思っています。使うことが目的ではなく、どこが最終的なゴールなのかを間違わなければ、活用できるものは与えながらも、それがメインではないということを確認できればいいと思います。使っている子どもたちはとても自然でした。

○ 福原市長

I C Tは英米法の発想なのです。思考も、ソリューションも、解決も。

教育長が最初に言ったことを、しっかり考えてから入っている人は付いていけるのです。付いていけない人がスマホ認知症になるのです。見ているだけで分析できないまま情報を整える力がなくなっていくます。

I C Tは紙と鉛筆、要は何を目指すかです。

○ 山田委員

私は城南小学校を見に行くことができなかったのですが、今日の釈迦内小学校と昨日の花岡小学校の授業を拝見したとき、まず、そこにあるのは人です。人と人との対面、これがコロナ禍でも教育長が一番頑張って、崩せない第一線だとしてやってきました。

リモートもやればできますが、それでも対面授業が一番大事だとしてやってきた結果、こういう形で学力が保たれています。デジタルデバイスがあっても、そこに何が必要かということと学習の目的です。

なぜ学習するか、なぜ勉強が必要なのかを子どもたちが分かり始めてきました。

今まで勉強が目的だったのですが、そうではなく、勉強は手段だということがふるさとキャリア教育を通して分かってきました。なぜ学ばなければいけないのか、なぜ学びが大切なのか、それを踏まえたらデバイスは道具でしかありません。それにふるさとキャリア教育を通して、子どもたちが気づき始めています。

デバイスを使ってもなじんでいて、デバイスが入り込めています。それがこの2年間、コロナ禍で培ったノウハウなのかなと、そういう理解が必要だと思います。

○ 福原市長

2年前のことですが、当時の総理大臣が一斉休校と言ったとき、休校せずにやり

ますと言ったのは高橋教育長です。そのとき、議会議員の方々は、「どうして休校にしないのか」と言いました。

学ぶ権利を持っている子どもたちに最大限の感染拡大防止をすることとして、結局それを押し切ってくれました。その後の夏休みや冬休みも全然影響を受けなかったのです。

○ 山田委員

だから集まってくると思います。なぜこういうことができたのか、こういうことがあったから、学びに来るのかなという気がしています。

○ 福原市長

大館は、間違いなく学びの目的地になっています。

○ 成田教育次長

ありがとうございました。

では、次のテーマに移ります。各課４つのテーマがございますが、一括で説明させていただいた後に各委員からご意見を伺いたいと思います。それでは、最初の「信頼と安全を築く教育環境の整備充実」から説明をお願いいたします。

（「信頼と安全を築く教育環境の整備充実」について、１から３まで小松原教育総務課長が説明）

（「ふるさとを担う「未来大館市民」を育成する学校教育の深化」について、１から３まで畠沢学校教育課長が説明）

（「ふるさとの誇りと未来を育む生涯学習の推進と支援」について、１から３まで糸屋生涯学習課長が説明、４は武田中央公民館長が説明）

（「郷土の歴史と文化を学び、大館びとの誇りを醸成する」について、１から２まで小松歴史文化課長が説明）

○ 成田教育次長

以上、各課のテーマを説明いただきました。ただ今のテーマにつきまして、十分な協議をさせていただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

ご意見、ご質問のある方は、挙手によりご発言をお願いいたします。

根田委員お願いいたします。

○根田委員

「郷土の歴史と文化を学び、大館びとの誇りを醸成する」は、本当に大事なことだと思います。小さい頃から子どもたちの豊かな精神や心を育てるには、やはり歴史と文化を子どもたちが自然に体感しながら育まれていければベストかなと思います。

ニホンガリガニの赤ちゃんを私も何度か見させていただきましたが、それを子どもたちが親子で見ている姿がほほえましかったです。

ニホンガリガニの専門家の方と協力して、さらに成長の増殖事業として進めるのだろうけれど心配もあります。生息するための場所をオープンにはしていませんよね。それが少し心配ですが、鳳鳴高校の生徒が数年前からずっとつなげてくれていることに感謝いたします。これからも大事に育てていってくださればいいなと思いますし、小さい子どもたちと一緒に育ててほしいなと思っています。

それから、博物館事業のライブ配信は何度か見させていただき、とてもいいと思いました。大館市と小坂町の博物館の学芸員の方々が、それぞれ自分の専門とする知識をライブで拝見できるということは、なかなかできることではありません。

博物館に行って直接聞くことも難しい方もたくさんいらっしゃるでしょうし、ごく一部の方だけが見られることに大変もったいないと思いました。その後、YouTubeで短い期間でしたが見られるようにしていただきました。それをやっているということを市民の皆様に報道してほしいと思います。

報道方法も難しいとは思いますが、専門の方の知識を共有できるのは大きな機会だと思うので、これからも積極的に進めてほしいなと思っております。

「ふるさとの誇りと未来を育む生涯学習の推進と支援」について、大館学び大学は、元気な方であればいくらかでも仕事も勉強もできるという期待感や希望があり、これは本当に年齢に関係なく仕事への意欲なども育ててくれると思います。

健康な方が、何もしないまま機会のないまま過ごすのはもったいないです。特に大館市の方々は、皆さん意欲的で勉強熱心の方が多いように見受けられます。この大館学び大学を大いに利用して、自分たちの意識を高め、働き方改革まで到達してほしいなと思います。難しいかも知れませんが着実に実ってきていると思います。

これを利用する方々の意識はどのようなものですか。

○糸屋生涯学習課長

5つの講座があり、働きにつながる講座ということでは、デジタル系のものに人気があります。地域に関連しているものや農業関係の講座もやりました。たくさんの人数ではないですが、そういうところに興味を持って参加される方がいらっしゃるのには確かです。

大館の特色を生かした講座の開催が必要になってくると考えており、参加を促していきたいと考えております。

○根田委員

大変でしょうけど、今後ともよろしくお願いします。

○成田教育次長

小笠原委員お願いいたします。

○小笠原委員

「教育の産業化の再始動」の視察団体に提供する資料を有料化し、それを各校に還元することは非常に新しい、いわゆる産業化かなと思いました。

先ほどから話が出ているように、電子黒板だったり、教師用のタブレット・デバイスだったり、不足しているところをこういうところから財源を得て更新していくのいいのですが、消耗品なのでなかなか大変だと思います。

私がアメリカで勉強してきたときに思ったのは、例えば、教室に企業のサポートでお金をかけてデバイスができ、その教室は企業の名前が付いた部屋になっています。

そういう意味では、電子黒板も予算が付いて買えば何年かは持つでしょうが、また更新時期がくると大変だと思います。

リース契約のようなもので大館市内の企業がお金を払い、こういうのを付けて、代わりに企業の名前が付いている、その企業が教育をサポートするという体制になるのかなと思います。

高価な消耗品がこれからも増えてくると思うので、そういうところも市の財源に頼らなくてもいいということが出てくればいいと思います。

大館は本当に素晴らしい教育がされていて、素晴らしい子どもたちが育っていくことを大館市民が知らないのは、すごくもったいないと思います。何かの機会に大館の教育の素晴らしさを大館市民に発信して、大館市民が知れる機会を増やしてほしいと思っています。

そういう意味で、福原市長にお願いがあります。

私が実行委員長を務めた長木小学校の１４０周年記念式典のときに、福原市長にお越しいただき子どもたちへの講話をお願いしました。そのときに市長は、「君たちのやる気スイッチは必ずどこかに付いていて、今は押せなくてもいつか押す機会がくる」とおっしゃいました。

やる気スイッチの話聞いた子どもたちが、今年、高校３年生で卒業する学年になりました。彼らにとって、あそこでの言葉は非常に大きなものだったと思います。

お忙しいのは承知していますが、いま一度、大館市長が子どもたちに熱く語る機会があれば嬉しいと思います。

○成田教育次長

工藤委員お願いいたします。

○工藤委員

学校教育の「第0次学力向上に関する提言」一人ひとりの資質・能力を育成するというので、これまでの土台に立って、さらに頑張りたいというところは大変共感しております。

いろんな個性をもった子どもたちがいるので、型にはめず、子どもたちそれぞれの良さを伸ばすという視点で、一層頑張ってもらいたいと思いますし、改めて大館の教育理念の「ふるさとに学び未来を創造できる人材をつくる」というゴールをみんなで共有しながら進めていくことが大事だと思います。

外への発信はもちろん大事ですし、大館にとどまらずというのも分かるのですが、それと合わせて、中にいる先生方への支援もこれまで以上に頑張ってもらいたいと思います。

学校では初任者がどんどん増えています。講師経験もなく、すぐに採用される方もいます。最近は免許更新制も廃止になったので、先生方の自主的な研修や研さんが求められるため、そのバックアップもこれから必要になってくるのかと思います。

今日、授業を見せていただいた後、研究所長と話したのですが、「いい授業をした後は幸せになる」と。大変なのですが、先生方には幸せな気持ちになってもらいたい。

そのためには準備をしなければいけないし、やらなければならないことがたくさんあって、それ以外の事務的なことをできるだけ周りがバックアップしてあげて、先生方が幸せに思ってもらいたいなと思います。

「共生社会の学習の充実」は、小中学校の特別支援教室について、地域の方々や保護者の方々を含め、一昔前に比べたら理解が深まったと思いますが、究極は自立ということだと思います。社会に出てからどういうふうに自立していくかということが大事だと思います。

今回の予定された取り組みは期待できるものだと思いますし、高等部からというのも本当に効果があると思うので頑張ってもらいたいです。

「地域の宝を活かした事業の実施と公民館事業への青少年の参加促進」では、大人も子どもも学び続けるというのは、これから、一層大事だなと思っています。実際に市民の方々はどれほどこういう意識があるのか、実態把握が必要だと思います。

高校生や30歳代の若者、高齢者は、どのような考えを持っているのか知ることでも大事ですし、そうしたうえで事業に反映させていただければと思います。

○成田教育次長

山田委員お願いいたします。

○山田委員

「教育の産業化」という言葉でいろいろ語られていますが、私は、「産業の教育化」ではないかと最近思います。というのも、先ほど小笠原委員が企業の寄附金で、例えばデバイスを継続的に購入できる、リプレイスできるといいという議論をしましたが、

そのためには地元企業、地元経営者が元気でなければいけない。

地元の経営者は、地元の若い人たちを使いたい訳です。学校から出てくる子どもたちが変わり、そして、その子どもたちに合わせて経営者も変わらなければ会社が継続できないのです。

ある先生からこういう話をされました。絵を描くとき、被写体が小さいとその絵は生き生きとしない。それなら絵の縁を切れればいいじゃないか、逆の発想をしていこうではないかと。私たちが変わればいい、見方を変えればいい、そんな発想がこれから大人の必要になってきます。

学校にはいい授業、いい先生たちがたくさんいるのであれば、学校の授業から私たち大人が学ぶことはたくさんあるのではないのかと思います。大館の教育が、実はマネジメントの最先端をいっていると思います。

そういう機会が大館の経営者、大館の大人にオープンになるような教育ができるようになれば、それこそが「教育の産業化」でもあるし、「産業の教育化」にもなっています。

このように、これからの教育の伸び代はそこにあるのかなと期待しております。そういう取り組みを大館が進めると、なお一層大人も子どももお互いに学ぶ機会がもっと多くなるのだらうと思います。夢物語のようですが、着実に一歩踏み出していると思います。

公民館の改築については、地元の意見を聞いたうえでこうなったと聞いております。まさに市民プライドもあるのですが、大館市は市長の求めるシビックパーソナルだなという気がしています。

まず、そこには市民がいる、教育の場には人間がいる、そういうスタンスで大館全市が取り組んでいるのかなということを非常に心強く感じております。

○成田教育次長

ありがとうございました。

委員の皆様からご意見をいただきました。

市長からご意見ございませんか。

○福原市長

教育委員会との政策協議を春と秋にやっていますが、秋の時よりも数段深く議論してくれているなと読み取れます。教育委員会の皆さん、議論してくれてありがとうございます。

例えば、生涯学習課長の説明ですが、企業との関わり合いを何回も教育委員会の事務局がするというのを聞いたことがありますか。実は、そこが「産業の教育化」、「教育の産業化」に大切だということを教育委員会の事務方が気付いていて、そういう面を教育委員会が持っているということです。

「共生社会の学習の充実」は、全国で15の自治体しか認定をいただいていない「先

導的共生社会ホストタウン」の位置に大館がなった瞬間に、教育委員会が障害を持たれている方の学びの機会を創ろうという議論をし、どんどん深まっていることは大切なことだと思って聞いていました。

山田委員の最後の一言というのは、私の政治家としての政策の曼陀羅（まんだら）の中にあるのですが、ずっと私は、市長就任以前より学びやスポーツを通じて人が育つ、まちも育つまちづくりをしたいという話をしていました。

冒頭、“日本は遅れてしまった”と厳しい語気で言いました。遅れてしまったのですが、これからどんどん必要になってきます。まさにSDGs的な考え方、カーボンニュートラルだったり、ジェンダーだったり、ダイバーシティだったり、私たちが民主主義を掲げて暮らしていくうえで、必要あるいは優先とされなければいけない事項は変わったのです。

昭和、平成から受け継ぐものはしっかり受け継ぎますが、令和の今は学びのステージも別の舞台に立ったのです。そして、企業も一地域社会人ですので、そこに教育からのアプローチが重要だと思います。

今、企業では働き方改革と合わせて社員の健康経営という考え方を出してきます。それは、市政であれば、市民の健康をいかに考えていくのかということと全く同じです。

そうなってくると、工藤委員のおっしゃっていた「学ぶ」という意識をずっと持っていただけの市民が増えるということは、素敵な市民が増えることにつながってきます。そういうアプローチは教育からでしかできないとされていて、すごく大切にしたいと思いました。

小笠原委員の“ぜひ市長から”ということに関しては、いつでもいいです。

今回、教育委員会とコラボして、南種子町にある三菱重工のロケットエンジン研究所へ行きます。そのまま名古屋市にある同社の工場を見ます。その後、東京羽田空港でANAの見学です。子どもたちが行くのですが、大人に広げてもいいと思っています。

フランスに行ってきた、有浦小学校との約束を果たしてきました。パリから車で6時間移動して、アルザス地方のストラスブールに行きました。アルザス地方の日本と取り持っている機関と北前船交流拡大機構、ひいては地域連携協議会と協定を結びました。ですので、これから頻繁にアルザスの人が来るけれど、私たちがアルザスに行くという時代が始まります。

ちなみに、ストラスブール大学の医学部は、ノーベル医学賞を何人も出している大学です。世界の中でも5本の指に入ります。いずれは、そこと市立総合病院、ひいては、弘前大学病院、秋田大学病院をつなげていく流れがあります。

ストラスブールは欧州議会があり、580人近く選ばれて欧州を構成していますが、その隣に欧州評議会というのがあります。それは、人権や民主主義、共通する価値観を欧州から発信する拠点が、実はアルザス、ストラスブールなのです。アルザスはフランスとドイツの歴史を鑑みれば、あそこでヨーロッパの歴史は形成していると言っ

てもよく、私たちの民主主義の原点です。

そういうところと私たちが関わるということは、教育の質をさらに高めていくことにつながると思いますし、EU本部があるブリュッセル、教育となればスカンジナビア諸国のノルウェー、スウェーデン、フィンランドです。県はフィンランドとの交流を考えているようです。

市長コラムに書くのですが、有浦小学校と子どもたちに君たちとの約束を果たしたと。次は、将来、君たちがヨーロッパに行って、大館、秋田のこと、日本のことを伝えてきて欲しいというメッセージを市長から送ろうと思っています。

○成田教育次長

ありがとうございました。

教育長から何かありませんか。

○高橋教育長

フィンランドの話が出ましたが、秋田県とフィンランド、北欧というのは地理的な条件や気候的に似ており、学力も高い。

北欧でやっていたのは、半世紀後を見通した教育によって、5年、10年の話ではない戦略なので、そういう点ではすごく学ぶ点があると思います。近未来のことも考えなければならいけれども、50年後、100年後の大館を考えながら、何を布石として子どもたちに残していくべきかということを常に考えながら進めてまいりたいと思います。

○成田教育次長

時間が迫っておりますので、この辺で協議を終了させていただきたいと思います。皆様から、さまざまなご意見、ご提案をいただきましてありがとうございました。では、議事進行を議長に戻します。議長よろしく願いいたします。

○福原市長

第2回を期待します。

皆様、ありがとうございました。